

## 随 想

### 泌尿器科紀要第20巻発行にあたって

吉 田 修\*

本号より泌尿器科紀要（以下「紀要」と略します）は20巻目にはいります。創刊以来満19年が過ぎたわけですが、これはとりもなおさず「紀要」が泌尿器科を専門とする人びとに必要とされたからであって、そうでなければこれだけ長期間発行がつけられるものではないと思います。

「紀要」は経済的には会費（購読料）と掲載料と、広告料（これはたいへんわずかです）よりなりたっています。しかしこのなかから人件費を捻出することはとてもできません。つまり、卒直にいうと「紀要」は京大泌尿器科教室の奉仕によって発行することが可能となっているわけです。各大学には、その大学から出されているいろいろな学術雑誌があります。京都大学にもいろいろありますが、それらの多くはその教室のために発行しているといった性格が強いように思います。しかし「紀要」には京大泌尿器科教室のために発行しているといった、いわゆる京大色はほとんどありません。これは毎号の投稿者をみていただければ自明のことと思います。また最近10年間の投稿者の所属を調べてみましたが、全国的に投稿者がちらばっており、特定の大学の教室だけに限られていないことがよくわかりました。

私は「紀要」発行の責任者となって以来、学術雑誌のあり方、そして「紀要」のあり方について、原点にかえて考えてきました。そしてきわめて平凡な結論ですが「紀要」が泌尿器科学の進歩のためにもっと役だつためには、さらに成長してよりよい雑誌、より権威ある雑誌へと発展することが必要と考えました。では、よい雑誌、権威ある雑誌とは何か。これもたいへん単純な考え方も知れませんが、それは多くの発行部数を有し（すなわちたくさんの人びとに読まれ）、学問的に価値ある多くの論文が掲載される雑誌と思います。そして、その論文にはすみずみまで筆者および編集者の神経がゆきとどいていて、読みやすきちゃんと整理されていなければならないと思います。さらに、権威ある学術雑誌は学問的に価値ある論文のみをaccept します。例えば“Nature”や“Science”（私

はこれらはよい雑誌、権威ある雑誌と考えています）には結果的には投稿論文の20～30%ぐらいしか掲載されないようです。すなわち投稿された論文を100%そのままのかたちで掲載することはけっして学術雑誌のあるべき姿とは考えません。けれども、これはそこまでのレベルにまで到達してはじめてできることで、今すぐ「紀要」をこのようにしようと考えているわけではありません。しかし将来こういった形式をとることになるのが望ましいと考えています。

「紀要」がこのように特定の大学、特定の教室のための学術雑誌でない以上、特定の大学の教授が1人で編集者、発行者を占めるのは正しくないと考えます。そこで今回、つぎの方がたと私が加わって編集委員会を組織することになりました。

石神襄次教授（神戸大） 前川正信教授（阪市大）  
宮崎 重教授（阪医大） 新谷 浩教授（関西医大）  
園田孝夫教授（阪大） 友吉唯夫助教授（京大）  
吉田 修（京大） （ABC順）

編集委員は関西地方の大学関係者のみであります。これは必要なときいつでも集まっていたことができるよう、地理的に近い方がたにお願いしたわけで、「紀要」を日本泌尿器科学会関西地方会の機関誌的なものにもってゆこうとの考えからではありません。

この編集委員会は「紀要」の本質的なあり方、編集方針について審議する会で、すでに1973年12月15日第1回の編集委員会をひらきました。編集の実際は従来どおり友吉唯夫博士を中心に行ないます。

「情報公害」という言葉が生れるほど種々な情報が氾濫している時代です。「紀要」がはたしていつまで泌尿器科領域の人びとに必要とされるかわかりませんが、必要とされている現在、少しでもよいものへとっていきたいと思います。これが泌尿器科学の進歩に役だつ道だと考えております。また、「紀要」に関してご意見があれば、編集部のほうへお知らせくだされば幸甚です。

「紀要」第20巻発行にあたって、過去19年間の長期にわたって「紀要」を支えてこられた諸先生がたに敬意を表し、同時に今後の「紀要」のあり方についての私の考えの一端を述べました。

\* 京大教授（泌尿器科学）